

第三章 世界を知るということ

リビの出立の用意は丸一日かかった。まずニンギシュジダの洞窟で主が離れるための儀式。杖で文字を描いたり、青の泉の水をまいたり。

杖の先の生首は黄水晶を彫つたもので、中に水を溜められるようになつてゐる。その中に溜めた水は聖水として扱われるとリビが言つた。昔からニンアズに伝わる杖らしく、あらゆる儀式に使われるようだ。

彼の儀式は水だけにではなく、草木や花、風、石、土、空、あらゆるものに語りかけるようなものだった。さらに頭蓋骨だらけのデインギルの泉にも潜り始めた。しばらくの別れをしてくるのだと言う。

水の流れのようにすいと泳ぐ彼のそばに、魚がやってくるのが陸からでも見える。軽やかな泳ぎは、トゥラスですら真似できないと

思った。水の化身とはうまく言つたもので、彼は本当に水に愛されているようだ。

トゥラスも潜つていいかと聞いてみたが「墓を何だと思っている」と一蹴され、近くの小川に追いやられた。

トゥラスとチュンオウが水浴びを済ませても、リビはまだ潜つていた。ようやく上がつてきて「泉の彼らも納得してくれた」と言つていた。泉の彼らとは、頭蓋骨の主たちか、それとも泉の水か。それを問うたチュンオウに、リビは両方だと答えた。

もう一度杖に泉の水を溜めてから、ようやく山越えが始まつた。山の裏側のチシュパクの港に向かうのだ。半日程で到着し、村に着いてすぐ雨が降つた。その雨がニンアズを迎えたのだと、村の人々は喜んでいた。村人ら男のほとんどは上半身が裸で、森と海で生

きる彼らの身体はたくましかった。

夕刻の雨宿りの村長の家で、しばらくニンギシュジダの洞窟を空けるとリビが言うと、誰もが反対した。この土地に恵みの水が毎日降るのはニンアズのおかげなのだから、いなくなつては困ると。

だがリビもなんとか説得をした。その時のリビは、一つも語気を強めることもなく、むしろ穏やかに一音一句を彼らの心に染み込ませるように丁寧だった。その甲斐あって、村人たちも最後は頷いた。

早朝、村を少し出たところにある海は、トウラスには見たことがないほど大きな水の広がる場所だった。見渡す限りの、水。視界に入りきらないほど大きい。この大地には、これだけの水を受け止める腕があつたのかと、ただただトウラスは驚いた。

そこに木と大量の草を縛って作った船を、村人が出してくれた。ニンアズが乗るからと、一番頑丈なものだそうだ。リョウキが乗つてもびくともしない。

船乗りらも二十人ばかり乗りこんで、こんなにたくさん乗つて沈みはしないかとトルラスは心配だった。しかしそんな心配は無用で、船は地に足をつけるがごとく堂々とそこに浮いてみせたのだ。

ようやく出港の時、村人はニンアズを盛大に見送った。小さくなつてもなお、彼らが手を振つているのが見えた。リビは杖を掲げて、彼らに応えていた。

気がつくと、いつの間にかそこは広い海の真ん中だった。海とは塩辛い水の池かと思つていたが、想像をはるかに絶する大きさにトウラスは目を奪われていた。

「空は広く、海もまた同じく広い。空と海の間に境界線が伸びて見えるであろう。あれを水平線という」

「水平線？あの先には何があるんだ？」

トゥラスが小首をかしげると、チュンオウは優しく微笑んだ。

「陸があるが、遠すぎて見えぬ。広いゆえ、あのような長い線のように見える。大地の遠くにある地平線と同じだ」

水平線など初めて見た。太陽は力強く輝いているというのに、その日光を我慢してでも辺りを見回せばにはいられなかつた。

「トゥラスよ。海は陸より広いのだ」

チュンオウがそんなことを教えてくれた。海の方が広いだなんて、初めはあまり信じる

気になれなかつた。しかし船が進むにつれて、そうかもしれないと思うようになつた。なぜ

なら、水平線は途切れることがなかつたのだ。海は広い。風も違う。日光の下、布をまとわねば目や肌をやられてしまうのが悔しいほどに、全てが美しかつた。

この清々しい風が、からうじて出ている鼻先と前髪を優しく撫でゆく。爽やかで生命を感じるこれが潮風というものなのだと、チュンオウが言つた。

トゥラスは潮風が好きになつた。いつかこの風を、思い切り受け止めてみたい。夜ならできるだろうか。しかし夜の海は危ないと船乗りが言つた。そう言わると余計に海が恋しくなる。そう言えば以前チュンオウは、この海を母のように感じると言つていた。それについてもう一度聞いてみた。

「爺さん、海から生き物が生まれたつてのは、本当の話か？」

チュンオウは一つ唸つてから、大洋に眼差しを向けた。

「そうであると私は信じているが、あまりに昔過ぎて誰も見たことがないゆえ、本当のところはわからぬ。だが、誰が見たのかわからんが、人は母親の胎内であらゆる生き物を経て人の形になると聞いた。母胎の中で人のこ

この塩辛い水に何が生きていいけるのだろうか。船乗りはたくさん魚が獲れることも、美味しい貝が獲れることも教えてくれた。足が八本ある奇妙な生き物や、いやいや十本あるものもいるだの、興味をそそる話ばかりで、それでは飛び込んでみようとトゥラスは言い出すほどだった。

第三章 世界を知るということ
の手は、水をかく鰯のよ^{ひれ}うなものがついている時期があるそうだ。もし本当にそうならば、人は海からやつてきたのだと思わんか？

しかしここは沖だから危ないと言われた。人より大きな魚がいるそうだ。いまいち納得に欠けているトゥラスに、チュンオウが諭した。

陸より大きい海だ。命の最初が海だというのは不自然ではあるまい。それに海は実際に多くの命を育んでおる。ここからでは見えぬが、この海の中にはたくさんの生き物がおるのだよ

「海にも虎のよ^ひうな、またはそれよりもっと大きく獰猛な獣のよ^ひうなものがいるのだ」
そのように言われて初めて、トゥラスは納得できた。

うまく想像できないが、海の中の森もとても美しいのだろう。水と光りの中で育まれる生き物たち。いつか行つてみたい。そんなことを言つていると、船乗りに海でどうやって

目を開け、ものを見るかと尋ねられた。

水で目を開けるなど造作ない。そう言うと、ならばやつてみると、桶おけに海水を入れて渡された。

昼寝でもしようかと思ったが、ヒョウビが遊んでくれとせがんでくる。仕方なく相手をしてやつた。喧嘩ごつこだ。ヒョウビもなかなか強くなってきた。

「食われるぞ」

見かねてリビが言つてくる。チュンオウも初めはこの遊びを見て驚いていた。本当に襲われているように見えるらしい。

桶に顔をつけて川でやるように目を開けると、目が潰れるかと思うような激痛が走つた。これで海に驚かされたのは二度目。美しいだけではないのが海だと、身を持つて思い知らされた。

船乗りは大層笑い、相変わらずチュンオウ

も声を上げて笑つている。世の中を知るのは大変だが、このような驚くことばかりでは知

る必要は大いにある。

海水はもうこりごりだと、勝手に流れる涙を拭つてから、トゥラスは揺れる船に寝転んだ。

海水はもうこりごりだと、勝手に流れる涙を拭つてから、トゥラスは揺れる船に寝転んだ。

はもつと、怖ろしい。

船出から約二十日後の昼過ぎ。太陽が真上にあり、さんさんと照る日光にトゥラスが参つてゐる頃、ようやく船は港に着いた。

ここはデニアという国らしい。一旦船を乗り換えねばならないのだと言う。チシュパクの民はヒエミチリアスと交易を結んでいいないので、ここまでしか見送ることはできないと船乗りたちはうな垂れた。

「私はチシュパクのために、遠い地でもニンアズの役目を果たそう。どうか帰りの船旅も氣をつけて。あなた方に水の恵みを」

リビは船乗りらの額に、杖の生首にためた水を一滴ずつ親指でこすりつけた。彼らはリビに毎日帰りを待つていると告げた。リビは穏やかに微笑んで「ありがとう」とだけ言い残し、背を向けた。それからリビは二度と振

り返らなかつた。

降りた港は、大きな市場の街だつた。青い海と対称的に、この街は白い。まぶしい家は白壁で、賑やかな市場も白の石造り。初めて目にする色合いだつた。海を隔てただけで、こんなにも雰囲気が変わる。文化とは面白い。しかしそのようない美しい街に、物騒な姿の者が多くうろついていた。大きな剣を下げたり、見たこともない大きな斧を担いでいたり、一体何があるのだろうか。人々の声弾むこの街に、そんなものが必要なのかと、トゥラスは怪訝に思つた。

「なにやら騒がしいな」

リヨウキにまたがつたチュンオウが、周囲を見渡しながら唸つた。

「戦もあるのでしょうか」

リビはそうつぶやくと、すぐに街の者に声

をかけた。

「お尋ねしたいのですが、もうすぐ戦でもあるのでしょうか。武人が多いようですが……」

市場で鮮やかな果物を吟味していた女が、

眉をひそめた。

「あんたちは違うのかい？」

「何がでしょう？」

「ああ、知らないんだね。もうそろそろヒエミチリアスが大きな戦をしかけるらしいんだよ。それで近くの国から兵を募っているの

さ。みんなヒエミチリアスに雇われる兵隊さんさ。あんたらもそういう志願兵の旅人かと思つたよ」

「ヒエミチリアスが……？　どこへ戦をし

かけるんですか？」

「よくわからないね。あの国は乱暴だからね

女は興味がないというように、肩をすくめてから果物の吟味に戻った。

「……急がねばなりませんね」

険しい顔のチュンオウは、リビに深く頷いた。

市場では金というものが必要だったが、いつものようにチュンオウが持っていた玉の

ぎょく

粒の交換でなんとかなったようだ。リビの話

術が巧みで、少ない量で多くの食糧が揃った。

市場では何の知恵もないトゥラスは、チュンオウにいくらか玉のかけらを渡されて、一度人の手から物を得てみよと言われた。いつ

も自然から恵んでもらうばかりでは、結局は森から抜け出せてはいないからと。

もらった玉のかけらは指先ほどの紫のも

のが三つ。たくさんひびが入っていたが、光りに透けて充分綺麗だ。

それを握って、トゥラスはヒョウビを連れて市場を歩いた。チュンオウとリビ、リヨウキとは、港で待ち合わせをすることになつている。

「お前、何か欲しいものあるか？」

ヒョウビは首をかしげる。

「そうだよな。なんだか、よくわからんねえよ

な」

見回せば、色々な店がある。あらゆる種類の豆の山、見たこともない形の木の実、色のついた水は変な臭いがする。

食糧はもう揃っているので、何を買えばいいのだろう。悩んでいると、様々な武器を売っている店があつた。どれも装飾が豪勢で、

剣もあれば鉈や弓も売っている。鞘の彫刻が

こういうたぐいの物は、チュンオウもリビも見ていないはずだ。彼らが使えずともこういったものならば自分が使えるし、実用的なので店に入つてみることにした。

鞘の美しいナイフを手に取つてみた。チュンオウがくれた剣よりも金や玉の装飾は簡素だが、それにしても彫刻が美しい。

しかし妙に軽かつた。鞘を抜くと、刀身はペラペラの板だった。これでは何も切れやしない。いくつか他の剣も見てみたが、どれも使い勝手の悪そうなものばかりだった。

「どうだい、旅のお方！」

店主らしき小柄な恰幅の良い男が言つてくる。トゥラスは顔を覆つたフードの口元辺りを少し下げて言つてやつた。

「こんな使い物になりやしない。兎の皮だ

つて剥げないようなものばかりだ」

店主は大きく笑った。

「兄ちゃん、これは全部装飾品だ。実用的なものじゃないさ」

装飾だけを楽しむ道具など一体何になるのか。店主はすぐにその答えをくれた。

「この辺はな、結婚する時に花嫁にこういう装飾の綺麗な武器を渡すんだ。お前を守つてやるっていう証さ。兄ちゃん、恋人に買ってつてやりなよ！」

「恋人？ そんなもんいねえよ」

驚きをめいいっぱいに顔に現わして、店主は言つた。

「良い男だつてのに、もつたいない！ そん

な美男子なら……まあ、布で隠れてるからあ

まり見えないが、もつと顔を出して歩けばそ
の辺の女ならみんな着いて行くだろうに」

「興味無いね」

ふいと顔を背けると、その先に小さな耳飾りがあった。装飾の武器ばかりなのに、それだけが耳飾りだ。少しくすんだ白っぽい石がはめ込まれている。

その石の中を覗くと、金や銀の粉が光って見えた。石の縁どりは古い金でできていて、虎をかたどったような模様がある。そこがとても気に入つた。足元を見ると、ヒョウビがこちらを見上げている。

「なあ、この飾りも売り物か？」

「ああ、これかい。一応な。昔どつかの旅人が物々交換で置いてつたんだよ。欲しけりや

売るよ。だが恋人がいなつてのに、それなら兄ちゃんがつけるのかい？」

トゥラスは店主には答えず、その耳飾りを取り上げた。ヒョウビの耳にある養母の形見

を外し、売り物の耳飾りをつけてやった。

「はは！ 似合うじゃねえか、ヒョウビ」

養母の形見は小指の爪より小さいものだ

つたので、毛に埋もれて見えなくなっていた

のだ。虎の耳飾りは比較的大きいので、成長

したヒョウビの耳にも目立つて見えた。

「これで売つてもらえるか？」

トウラスは店主の手のひらに、三つの玉を落とした。

「まさか、これだけ！」

「少ないか？」

そんなトウラスに、店主は呆れて言つてきた。

「これは駄目だ」

「こんな石ころが金になるっていうのかい！」

「石ころって何だよ。よく見てみな。結構綺麗だぜ」

第三章 世界を知るということ

「磨かれてもいいじゃないじゃないか」「なら磨けばいいじゃねえか」

店主は大きなため息の後、片手を差し出した。

「何だ？」

「これだけじゃ売らないよ。ほら、返した返した」

「じゃあ、どうしたら売つてくれるんだよ」

「手つ取り早いのは金だな。それか、ここでしばらく働くかだ。それから、その腰の剣。かねそれと交換なら、釣りは出すよ！」

爛々とした目でチュンオウがくれた剣を見るので、立ち位置をずらして隠してやつた。

さて、どうしたものか。金というものがないなら働かねばならないらしい。しばらく働く

けと言われても、そんな暇はない。日が沈まぬうちに港に行かねばならないのだ。

「働くって言つても、時間がないな。手つ取

う言うと、彼は店の男を呼んできた。話を聞いた男は、不敵な笑みでこちらを見てきた。

り早く済ます方法はないか？」

「ないない！」

だがそう言つた直後、店主は何かをひらめいたようだ。

「そうだな、あいつに勝つたら石ころ三個で

売つてやつてもいい」

短い黒い髪の、彫りの深い茶の目がトゥラスを映した。太い眉と、手入れされた髪。なかなか強面だが、トゥラスは「何をすればいいんだ？」と肩をすくめて尋ねた。

「俺を倒せばいい！」

店主が指差したのは、向かいの店の男だった。大きな樽をいくつも置いた店だ。何の店なのかトゥラスにはよくわからなかつたが、

厚い胸板を張つて地鳴りのような声で言う男に、トゥラスは「なんだそりや」と小さく呟いた。そんなことで何がどうなるというのか。

それよりも見るべきなのは店の男。なかなか屈強な体躯をしている。

「あいつは力が強くてな！ 今度ヒエミチ

してにやりと笑った。

闘いの理由が理解できなかつた。チュンオ

ウは、人は虚しい争をして世界に戦をもたらすと言つていた。確かに、こんなやつらばかりが集まつてしまつたらそくなつてしまふかもしれない。

トゥラスは少し眼光を鋭くして、その男を睨みつけてやつた。

「良い眼をするじゃないか、小僧」

男はやや怯んだ様子を見せたが、次には面白そうに笑つて、さっそく拳を振つてきた。男の岩のような拳が、風を切つて迫つてくる。

咄嗟に飛びのいて避けたので、トゥラスは道の真ん中に出てしまつた。ここでは他の客が巻き込まれてしまいそうで危ない。そう思つたが、男はさらにこちらに剛腕を振るつてきた。腕で受け止めると、衝撃が全身に響く。

これで胴をやられてはひとたまりもないだろう。

男の拳は、幾度も降り注ぐ。トゥラスは腕で受け止めるのをやめて、全て避けることにした。

「避けてるだけじゃ面白くないな。そうだ、お前が負けたら、俺の店で一年タダ働きしてもらおうか！」

それは嫌だ。なぜこんな男の下で一年も働かなければならぬのか。しかしそんな反論も飲み下すほど、男の拳を避けることにトルスは集中していた。

男はいつも寸前で避けるトゥラスに痺れを切らしたのか、装飾武具店の剣を持ちだした。

「おいおい、いくら使えない武器だからって、危ないだろ！」

周りの客が危ない。そういう意味で言つたつもりだったが、男は取り違えたようだ。

「怖氣づいたか？」降参するなら今のうちだ

馬鹿か、この男は。

男が剣を振り上げた一瞬の隙に、トゥラスは周囲の状況を捉えた。見物の人だから、ぐるりと自分らを囲っている。「やつちまえー！」と、何人かが叫んでいた。こんなものを見て何が面白いのだろうか。

「よそ見なんてしていいのか！」

ためらいもなく振り下ろされる剣が、前髪をかすめた。

「危ねえな……！」

舌打ちをして、そう吐き捨てた。トゥラスは背後の野次馬を気にしながら、幾度も避け

てやつた。

「ちよこまかと逃げやがって！」

剛腕と共に、剣がひときわ大きく振り下ろされた。それを機に、トゥラスは大きく数歩下がって、野次馬の女が抱えていた荷から大きな木の実をひょいと取り上げた。

「悪いな。一つもらうぜ」

女が返せと喚く前に、トゥラスはそれを思
い切り男に投げつけた。

「うわっ！」

男は突然の反撃に、少し身体を強張らせた。その一瞬が、トゥラスの狙つた好機であつた。

トゥラスは刹那に、チュンオウにもらつた剣を抜いた。

「甘いな！」

男は木の実を避けた姿勢からすぐに剣を振り降ろす。

ギンと、刃と刃がぶつかった。こんな音は初めて聞く。いつも刃で斬るものは食用や生活に必要な動物や植物なので、耳障りな音にトゥラスは顔をしかめた。

金属同士の嫌な感触を右腕で耐えた。力では敵わない。だから刃を滑らせて、男が前めりに揺らめく隙に、するりと男の脇を抜けた。

そして間髪入れずにトゥラスは跳躍した。男がやっとこちらに振り向いたときには、トゥラスの蹴りが風を切っていた。男の振り向きぎまに、トゥラスは側頭部を蹴り飛ばしてやつた。

そして着地の直後にもう一発、鳩尾に鋭い

これが百戦錬磨の男か。重たい音をたてて、あつけなく倒れてしまつた。なんと人はもういのだろう。森で虎と共に生きていたついこの間まで、運が悪ければ相手は狼。この男は狼の足元にもおよばない。あの森に入つたら、森 자체に喰い殺されてしまうだろう。

気がつけば見物人は歎声を上げていた。何

への歎びか。食べ物が得られた歎び、違う、
よろこ

湧水を見つけた歎び、それも違う。よくわからぬが、それはとても虚しいもののようになえた。チュンオウトリビが戦を広げるヒエミチリアスへ急くのも、わかつた気がした。
せ

「兄ちゃん、すごいじゃないか！ 本当に倒すとは思わなかつた！」

装飾武具屋の店主は、野次馬たちに介抱さ

れている男のことなど放つておいて、こちらへやってきた。小さな丸い眼を大きく開いている。

「あれは石ころ三個で譲ろう。約束だ」

そう言つて耳飾り一つをトゥラスに握らせた。もう片方は、ヒョウビにつけっぱなしだ。

「……ありがとう」

あまり気持ちの良い方法ではなかつたが、気に入った虎の耳飾りを、トゥラスはふさがりかかっていた左耳の穴に通した。右耳は養母の形見。ヒョウビにつけていたもう片方の形見は、先ほどなくさないようとに胸の革袋にしまつておいた。

「押すな！ 苦しい……！」

こういう時はどうしたらいいのだろうかと、トゥラスは人ごみに揉まれながら立ち往生するしかなかつた。これだけ沢山の人々を一度に見るのも初めてなのだ。人ごみをかき

倒れた男はまだ目を覚ましてはいない。しかしあの程度で死ぬほど弱くはないだろうと見て、トゥラスは先を急ぐことにした。あ

んなに威勢よく剣を向けてきたのだから、こちらが謝る必要はないはずだ。

港へ向かおうとトゥラスが踵を返すと、いつの間にか人だかりが多くなつていた。市場で最も強い男が、旅の者に倒された。それはこの狭い通りを人でいっぱいにするには充分の噂だつたようだ。ぎゅうぎゅうとひしめいて、ついにトゥラスにわつと迫ってきた。

強いだのすごいだの、どこから来たのかという質問や、娘をもらってくれだの、色々なことを一度に言われて、トゥラスは彼らの勢いに押されてしまった。

一度に見るのも初めてなのだ。人ごみをかき

分けるのは、森の茂みを抜けるより難しい。人とはこのような生活を常としているのだろうかと考えると、森が恋しくなった。

そんなトウラスを助けたのは、先ほど倒し

たはずの男だった。

「おいおい、困ってるだろうがよ」

男の太い声で、野次馬は少しだけ後退した。

「あれは酒なのか？」

完全に鳩尾に入ったのに、男はもう平気な顔で立ち上がっている。強いと自負するだけの素質はあるようだ。昔、高い木から滑り落ちて、下の枝に鳩尾をぶつけたことがある。あの時はしばらく声も出せず動けるものではなかった。それを思うと、この男はすごい。

だからこちらにやってくる男に警戒した。足を一步引き、腰を落とす。

「もう何もしねえ。安心しろ」

言葉の通りのようで、彼はにこやかだった。「まさかなあ、蹴りでやられるとは思わなかつたぜ。俺の負け祝いに、そこの酒樽を好きだけ持つていけ！」

男が指さしたのは、男の店に並ぶたくさん

の樽だった。トウラスはぎょっとして男を見上げた。

道中、チュンオウが幾度か飲んでいるのを見た。一度もらつたことはあるが、喉が焼けそうで嫌になつた。その後も鼓動が速くなり体も熱くなつて、自分はもう死ぬのではないかと思わされたのだ。そんな変な水などもうごめんだ。海水よりも嫌いだ。

「ここらの酒は麦だが、お前さんは麦の酒はいけるかい？」